泥の河

小栗康平　木村プロ　１９８１年

衣斐弘行　文芸評論家

原作より優れた映画がままあることは知っていたが、この映画はその代表作。原作者宮本輝は同世代の作家。周知の如く原作「泥の河」は１９７７年第１３回の太宰治賞受賞作品。当時の太宰治賞は筑摩書房主宰で選考委員の顔ぶれも植谷雄高はじめ錚々たる読み手巧者が揃っていた。嘗てその賞に応募した一人として受賞作「泥の河」は幾度となく読んだ。同世代ながらその老成した心理描写や作品構成は実に秀逸で文体も太宰作品のように灰汁（晦渋？）もないものであった。原作が単行本化され数年したころ映画化された。監督はそれまで未知の小栗康平という人であった。映画を観るまで原作を超える映画ではあるまいと高を括っていたがそうではなかった。冒頭場面からラストシーンまでほぼ原作に忠実で抑揚の効いた演出で殊に作品の核になる三人の子役の心象演技の妙に驚愕した。それまでに主に洋画を観てきたが邦画を見直すきっかけとなった一作。

市民ケーン

オーソン・ウエルズ　米　１９４２年

長田紀生　脚本家

映画で人生が変わるか？　変わる。オレの場合は変わった。如何にして変わったか？　そんな深遠なテーマを与えられた字数で書ける訳がない。映画を舐めるな！人生を舐めるな！　事実だけを書く。初めての出会いは一九六三年大学三年の時。映画雑誌に『市民ケーン』のシナリオが掲載された。酷い翻訳だったが、新藤兼人さんの解説と分析が鮮やかだった。緻密で的確な構成に驚嘆した。以後、シナリオは構成だと信じている。ＴＢＳの試写室で初めて実際の映画を見た。映像の技法と迫力に圧倒された。以後、映画は映像だと信じている。卒論のテーマはオーソン・ウェルズに決まった。大学四年の時、戯曲に翻案脚色して新宿紀伊国屋ホールで七日間上演した。それを見た映画プロデューサーが東映にスカウトしてくれた。かくてオレは映画の世界に足を踏み入れた。これで人生が変わらなかったと言えるか？